

会員の便り

石狩川のサケ放流事業

大雪と石狩の自然を守る会

3年計画で行ってきた石狩川のサケ稚魚放流事業が今年最終年を迎え、3月23日に50万尾の放流が行われました。

この事業は、行政法人さけますセンターが事業主体となり、2009年春の放流から3年間150万尾放流を目標に、大雪と石狩の自然を守る会を主軸とする市民団体の熱心な協力で行ってきました。

明治時代頃までの旭川周辺「石狩川上流」には、秋には10万尾程度のサケが上り、アイヌの生活を支えていました。勿論、人工ふ化導入前の時代ですから天然産卵で守られていました。しかし和人統治、食糧不足、河川開発の時代を背景にサケの減少は続く中、やがて訪れた日本の経済復興最優先の時代。石狩川本流は産業排水で暗黒の川となりました。それでもサケは上りましたが、産卵するまでに力尽き、あるいは、僅かに生まれた稚魚は食べる餌もなく、サケは急速に減り続けました。そしてだめ押しをするように、1964年、深川市に農業取水のダムが出来た頃を境に「石狩川上流のサケ」は途絶えたのでした。

大雪と石狩の自然を守る会では、そのサケを呼び戻そうと、入手出来る僅かな放流でしたが、1984年から地道な稚魚放流を続けてきました。それに応え2000年には深川のダムに魚道が設けられ、2003年には旭川市内付近で2尾の自然産卵が確認され、サケ回帰への夢が膨らんでいました。

一方、1888年に始まった北海道の人工ふ化事業は技術革新が実り、1970年を過ぎるとサケが急速に増え、それまでの高価なサケは庶民のサケとなりました。しかし、この画期的な資源保護の技術も、研究が進むにつれて見直す必要が出てきました。「生物の多様性」などの言葉でも表現される「自然界の摂理に基づいた保護」のあり方を振り返る必要が出てきたからです。その一つが、自然産卵群の育成保護です。さけますセンターでも近年この取り組みを進めていますが、その中で、旭川での天然産卵の実績を手がかりに、最も大がかりに取り組んでいるのが、石狩川上流の自然産卵群の創生なのです。

現地のニュース記事を添付してご紹介します（本HP上では、会員の活動－石狩川にサケを呼び戻そう）。

（事務局記）

カナダとのサケ学習へ学童12名出発

北海道サーモン協会

3月26日、千歳国際空港から12名の学童（小5～中1男女各6名）がカナダ目指して出発しました。隔年で相互交流をしているカナダとの「第3回サケ学習国際交流事業」に夜者です。4月3日までの9日間ですが、その間ホームステイをする子ども達には、盛りだくさんのサケや環境の学習や山や牧場での交友事業が待っています。

折悪しく、東北大災害、とりわけ放射能漏れの問題で、一時は父母から危ぶむ声が出て混乱もありましたが、お互い冷静さを取り戻して出発にこぎ着けました。

その間、カナダの関係者から災害の影響の心配や、激励の言葉など深い友情の数々が寄せられ、関係者を励ましてくれました。

(事務局記)

事務局便り

○ 年度の変わり目の時期をお迎えしましたが、災害などのアクシデントもあり、それぞれにご繁忙のことかと思えます。ご精励下さい。

○ 気軽な話題、新年度の活動計画、'10年度の業績など何でも結構です。メモでも結構です。情報をお寄せ下さい。

送り先はこのアドレス、または、Tel/Fax (011-894-0081) まで。